

令和元年6月24日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12058

研究課題名(和文)ナラティブ・アーカイブを活用した臨床倫理教育の構築

研究課題名(英文)Construction of clinical ethics education using the Narrative archive

研究代表者

坂井 さゆり (SAKAI, SAYURI)

新潟大学・医歯学系・教授

研究者番号：40436770

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ナラティブ・アーカイブは、がん患者の病のナラティブ 高齢者の病のナラティブ 健康被害のナラティブ 喪失のナラティブ 看護師のナラティブ 看護学生のナラティブについて、各種資料よりまとめた。交流・対話のナラティブの「場」の記述では、人生紙芝居の作成と上演 フォスター・ホーム(ホスピス)でのフィールドワーク 倫理研修会での観察 ナursing・カフェなどの観察から考察した。ナラティブ・アーカイブを活用した臨床倫理教育の2つのワークショップから、多様な立場、価値観をもつ参加者による対話づくり、場づくりがアドバンス・ケア・プランニングに向けた文化づくりに必要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人生最終段階の医療とケアの決定プロセスのガイドラインに基づくアドバンス・ケア・プランニングが必要とされる中、ナラティブ・アーカイブを活用した臨床倫理教育は、ケア実践と教育、当事者と医療者、看護師と医師・他医療者、これらをつなぐ「対話の場」となり哲学する機会を医療者(医療系学生)に与える。患者を生活者として捉える「物語的転回(ナラティブ・ターン)」を意図的にしかけ、高度に発展し続ける医療、機能分化する医療の中で、患者と医療者が目標を共有し、意思決定支援における医師や看護師のジレンマへの対処を可能とすることにおいて意義があると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The Narrative Archive is created from interviews and various materials about narratives of diseases of cancer patients, health problems, loss, nurses, nursing students. In the narrative 'place' description of interaction and dialogue, I considered from the making of a zinsei-kamishibai and the observation at a fieldwork at a Foster Home (hospice) performance, ethics workshop, nursing cafe etc. From two workshops of clinical ethics education using narrative archives, it is necessary to create a dialogue with diverse positions and participants with values and to create a culture for advanced care planning it was thought.

研究分野：臨床看護学

キーワード：ナラティブターミナルケア 緩和ケア 臨床倫理 看護教育 アドバンス・ケア・プランニング ケアリング

1. 研究開始当初の背景

(1) 医療におけるケアの分断化への危惧

筆者らはこれまで、臨床倫理の統合的方法論の検討を試みるため、医療者を対象とした倫理研修を多く実施してきた。その際、病院に従事する看護師が、ジョンセンらの臨床倫理の四分割表にある「患者の意向」と「QOL」の欄を埋められないという傾向を経験した。これは何故であろうか。看護師らは「患者とゆっくり関わる時間がない」、「業務に追われカンファレンスをもてない」など、医療現場の構造的な課題の中での不全感について語った。

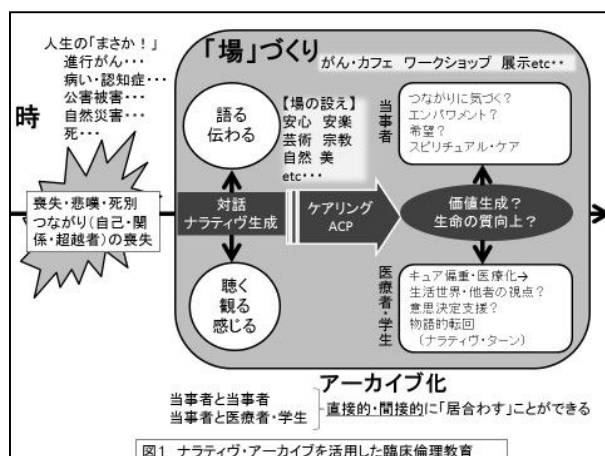
2013年12月、「持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関する法律」が成立した。ここには、個人の選択を尊重した健康管理や疾病予防の自助努力が喚起される仕組みづくり、「病院完結型」から「地域完結型」にシフトした地域包括ケアシステムの構築などが掲げられている。しかし、現在の日本の医療制度は、在院日数の短縮化に伴う診療の連携は発展しつつあるが「継続的なケア」は十分とは言い難い。「患者の意向」や「QOL」を理解するには、「傾聴と共感」による当事者の人生史をふまえた「ナラティブ(語り・物語)」や、生きる意味の喪失に感じようとするスピリチュアルケアが重要であり、セルフケアや意思決定もまた、患者と医療者の対話プロセスにおけるケアリングによって促進されると考える。現状の社会保障制度改革において「ケア」をつなぐしくみをいかに作るか、国民・医療者双方にとって重要な課題である。

(2) ケアリングの「場」と学術的研究の必要性

ケアリングとは「感じ取り応答する能力であり、関与すべき誰かまたは何かに反応すること(ローチ 1992)」と言われている。筆者もまた、ケアリングを「ある<時>において対象と現象を共にしながら、対象の価値を感じ取り、感じ取った価値に応答するという相互関係を発展させていく関わり(坂井他 2008)」と定義した。対象の価値に触れる、つまり「腑に落ちる」には、当事者の「ナラティブ」に出会う必要がある。筆者は、欧州や日本における緩和ケア研究において、患者の「つながり」について論じた。近代ホスピスケアのパイオニアであるシリリー・ソングースはスピリチュアルな問題について「最期に何につかまっているかを定めることができるのは患者である。それは自然であるかも宗教であるかもしれない」と述べた。中真生は苦しみと希望について、レヴィナスの「無限に他なるもの」から考察し「希望とは、苦しみのさなかに吹き込まれる他なるものの息吹であり、それは苦しみを終わらせはしないが、自分自身に釘付けにされた閉塞の孤独から苦しみを解き放つ」と述べている。深い苦悩や身体を自由を奪われた人々が、閉じていく自己の空間において、何とつながろうとするのかを、医療者は当事者から学ぶ必要がある。しかし、病院勤務の医療者は、患者との対話時間が少ない上に信頼関係の構築を求められ、いのちに関わる重要な決定を委ねられる。患者もまた自分の希望や思いを十分に伝えられず、いつしか自己コントロール感を失ってしまうことがある。樋野による「がん哲学外来」やがん治療病院などで行われる「がんカフェ(サロン)」のように、医療の隙間を埋めるケアリングの「場」が求められる。しかし、そのケアリングの「場」の有用性を学術的に明らかにした研究は少ない。

(3) ナラティブ・アーカイブを活用した医療者の緩和ケアと臨床倫理教育

高度先進医療やエビデンス・ベースト・メディスン(以下 EBM)は、疾病の回復に多くの恩恵をもたらす一方で、医療者の倫理的感性を鈍麻にし、ヒトの生の一貫性である「不可侵性 integrity (Rendtorff 2002、宮坂 2011)」を脅かし、“その人らしさ”を毀損しかねない。そのため近年 EBM とナラティブ・ベースト・メディスン(以下 NBM)の融合が言われているが、筆者はさらに、ケアリング・ベースト・メディスン(以下 CBM)を医療者の基盤となる態度として提案してきた。それは、臨床にある患者が「喪失」という「危機」において、「弱さ vulnerability (Rendtorff 2002、宮坂 2011)」を経験している故である。「人生のまさか!」といういのちの極みに立った時、人を動機付けるものは何であろうか。特に緩和ケア領域においては、医療者が人を「患者」として診ているだけでは見えない苦悩があり、そのことが療養上の意思決定に深く関ることがある。筆者は、人の一生について「常に危機と対峙し、その苦悩や痛みに対処しながら自他に問い、いつしか自己の答えに自ら気づくことで、より豊かに変化していく過程」であると考えている。ナラティブ・アーカイブは、「生活者であるその人」に医療者を出会わせてくれる「ケアの場」となる。当事者にとっても、自己や他者のナラティブに触れることで「ケアの場」となる。ナラティブ・アーカイブは、当事者と医療者の協働作業による新たな価値を生成し、臨床倫理の多様な課題について学習する機会を我々に与えてくれると考える。当事者や医療者(医療系学



生)が、直接的・間接的にナラティブに出会う場を活用した臨床倫理教育を構築することは、在院日数の短い現代の医療において重要であると考え。(図1)

2. 研究の目的

(1)「人生のまさか」を経験した当事者の語りを収集し、多様な媒体を用いたナラティブ・アーカイブをつくる

(2)当事者、医療者(医療系学生)の交流・対話のナラティブを分析し、「場」に生じる「ケア」や「意味」を可視化する。

(3)医療者(医療系学生)を対象にAおよびBを用いて、ワークショップを実施し、緩和ケア領域におけるACPの実践での医療者の役割や意識の向け方についての気づきを記述し、臨床倫理教育を考察する。

3. 研究の方法

本研究計画は、当事者、医療者(医療系学生)を研究参加者とし、以下の3つの調査を実施する。【調査1】は、「人生のまさか」という喪失もしくは危機に遭遇した当事者の物語を、リースマンのナラティブ研究法を用いて作成・集積(アーカイブ)する。【調査2】は、当事者と医療者(医療系学生)の交流や対話を通し、物語が生成する「場(これもアーカイブ)」の意味を観察し、ケアの在り様を記述する。【調査3】は、調査1と調査2のナラティブ・アーカイブを活用し、緩和ケア領域における医療者(医療系学生)を対象とした教育ワークショップを開催し、参加者の評価から教育方法の検討を繰り返し、ナラティブ・アーカイブを活用した臨床倫理教育の有用性を検討する。

(1)【調査1】ナラティブ・アーカイブの作成

期間：2016年4月～2018年12月

対象：病い、健康被害、喪失の語り手

方法

- ・資料・情報収集

- ・語りの収集

個別面接調査、がんカフェ、ナーシングカフェ、ライフストーリー制作、講演、物語展示、ワークショップ等の事業を企画・実施し、その場で得られた物語を記録する。また、既存の手記・記録類も収集する。

- ・制作

リースマンのナラティブ研究法(宮坂他監訳、坂井一部訳2014)を参考に、また、物語制作学習法としての「人生紙芝居」の作成により、物語として再構成する。物語は種類に応じ、パネル化、書誌化、紙芝居化、デジタル化する。

(2)【調査2】交流・対話のナラティブの「場」の記述

期間：2016年4月～2019年3月

対象：調査1における「場」および緩和ケアのACP実践場面

方法

- ・データ収集

調査1における「場」において、研究参加者の対話や行為をエスノグラフィ法を用いて記述する。データは録音およびフィールドノートに記載する。

- ・データ分析

リースマンのナラティブ研究法を参考に、参加者の相互作用(対話)において、会話がどのようにして作りだされ、ナラティブとして演示されるかを探求する。

(3)【調査3】ナラティブ・アーカイブを活用した臨床倫理教育の検討

期間：2017年4月～2019年3月

対象：医療者および医療系学生

方法

- ・調査1および調査2で作成したナラティブ・アーカイブを活用したACP教育ワークショップや講義を企画・開催する。参加者に対し、ACP教育ワークショップや講義参加の前後でアンケート調査を実施し、内容の有用性を評価する。ナラティブ・アーカイブを活用した臨床倫理教育の有用性について検討する。

4. 研究成果

(1)ナラティブ・アーカイブの作成

多様なナラティブを収集し、事例、教材、人生紙芝居等にまとめた。

がん患者の病のナラティブ

高齢がんサバイバー、子育て中の婦人科がんの患者、同種造血幹細胞移植後の患者、緩和ケアを受けながらホスピス病棟で死を迎える患者、最期まで治療を続けながら死を迎える患者、治療に伴う脱毛を経験している乳がん患者、手術による生活機能障害を抱える乳がん患

者など

高齢者の病のナラティブ

認知症がある人、ハワイに移住した日系人でホスピスを利用している人、胃ろうを造設術を受け退院する高齢者と家族、在宅で療養しながら死を迎える人など

健康被害のナラティブ

新潟水俣病患者、元ハンセン病患者など

喪失のナラティブ

失語症、祖母・祖父になる親、不妊状態にある人、被災者など

看護師のナラティブ

神経難病看護に従事する看護師、看取りケアに従事する一般病棟の新卒看護師、乳腺外科外来の看護師、がん告知に関わる看護師、失語症患者に関わる看護師、介護施設で勤務する看護師、抗がん剤治療中止にかかわる CRC 看護師など

看護学生のナラティブ

ターミナルケアについて学習した看護学生、緩和ケア実習を履修した看護学生など

(2) 交流・対話のナラティブの「場」の記述

参加者の相互作用（対話）において、会話がどのようにして作りだされ、新たなナラティブに変化するかを考察した。

人生紙芝居の作成と上演

看護学生らが、元ハンセン病患者、あるいは新潟水俣病患者にインタビューを行い、それぞれの患者の人生紙芝居を制作し、当事者の前で実演した。それらの活動を通して、看護学生は当事者の視点の立つことを学び、当事者もまた人生紙芝居を通して新たな語りがあった。ある当事者は、「自分の人生を宝物にしてもらった」と語った。

フォスター・ホーム（ホスピス）でのフィールドワーク

日系人の認知症高齢者が、フォスター・ホームで暮らす体験の記述から、文化や医療保険制度による影響、看護師間、家族間、ボランティアを含めたケアチーム間の価値観の違いが意思決定およびアドバンス・ケア・プランニングに作用していることが観察できた。アドバンス・ケア・プランニングや臨床倫理の研修会での観察

アドバンス・ケア・プランニングの講義を行った後に、カードゲームや漫画のナラティブなどを使用し、多様な立場（多職種もしくは異なる職場）にある参加者の対話を試みた。参加者は多様な価値を知ることができ、新たな視点に気づきを得ていた。

ナーシング・カフェ，がんカフェ

「新潟大学ちいきの保健室ナーシング・カフェ」では、学生、一般市民、教員が、がんのことや ACP を題材に対話した。がんカフェでは、患者、家族、学生、医療者、支援者などが集い、体験を語り合った。いずれも、多様な立場、多様な価値、多様なナラティブに出会うことで、参加者の新たな気づきになっていた。

(3) ナラティブ・ア - カイブを活用した臨床倫理教育の検討

ワークショップ「死生学カフェ@にいがた海がたり」を通じた検討

本ワークショップは、絵本をきっかけとした哲学対話的カフェとした。参加者は、学生、医療者、一般市民、大学関係者 30 名であった。絵本をきっかけに、死についてグループ対話から全体対話を行った。絵本の話から徐々に、参加者の体験が語られ、多様な立場からの死や生の対話がなされていた。参加者は「いろいろな人の意見を聴くことができ物事を多角的に観るときの視点がわかった」などの評価を得た。また、ワークショップの意見の中で、海辺の環境がよかった、話しやすい自由な雰囲気よかったなどの声も聴かれ、対話のための場づくり（環境づくり）の必要性が考えられた。

高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケアのフォローアップ研修会を通じた検討

本ワークショップは、事前に実施したエンド・オブ・ライフ・ケア研修会に参加した研修者に対し、事例検討と哲学対話的検討を実施した。参加者数は、学生および看護職 4 名であった。参加者は、「死」については奥が深く、課題は多いがチームで話し合い良いケアができるようにしたい、チームで行うと、他職種と重きを置くところがズレておりジレンマもあるが、看護のプロとして、「今」の現状でベストなケアを実践していきたいなどの、気づきを述べた。

以上より、多様な立場の参加者が集う場において、あるナラティブをきっかけに参加者によって多様なナラティブが新たに醸成された。このことが、新たな認識や行為を動機づけることにつながると考えられた。また、ワークショップを進める中で、対話が促進され、対話がケアとなるためのリラクゼーションや場の安全性のという環境づくりの重要性が増し、人間の情動（自律神経）への視点や場づくりのための検討の必要性が考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 22 件)

小田香澄, 後藤康子, 伊東舞, 阿部久美, 石井幸弘, 坂井さゆり. 同種造血幹細胞移植後患者の試験外泊時の思い. 新潟大学保健学雑誌. 査読有. 15(1). 2017. 39-47.

菊永淳, 宮坂道夫. がん告知における看護師の困難感 根治治療が困難になったがんの患者をめぐる3つのナラティブ. 医学哲学医学倫理. 査読有. 35. 2017. 34-41.

他 20 編

〔学会発表〕(計 54 件)

坂井さゆり. 新潟県におけるネットワーキング・コーディネート、文化醸成に向けた教育的取り組み(シンポジウム). 日本緩和医療学会第1回関東・甲信越支部学術大会. 2018

五十嵐聡美, 高杉多恵子, 内山美枝子. 抗がん剤治療中誌に関わる CRC の経験に関する質的研究. 第1回新潟がん看護研究会学術集会. 2017

他 52 件

〔図書〕(計 13 件)

坂井さゆり 他. 田村恵子編. 新体系看護学全書経過別成人看護学 終末期看護: エンド・オブ・ライフ・ケア. 2017. 全 400 頁

宮坂道夫 他. 看護倫理 第2版 (系統看護学講座 別巻). 2018. 全 231 頁

他 11 編

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 内山 美枝子

ローマ字氏名: Uchiyama Mieko

所属研究機関名: 新潟大学

部局名: 医歯学系

職名: 教授

研究者番号(8桁): 10444184

研究分担者氏名: 宮坂 道夫

ローマ字氏名: Miyasaka Micio

所属研究機関名: 新潟大学

部局名: 医歯学系

職名: 教授

研究者番号(8桁): 30282619

研究分担者氏名: 菊永 淳

ローマ字氏名: Kikunaga Jun

所属研究機関名: 新潟大学

部局名: 医歯学系

職名: 助教

研究者番号(8桁): 50634862

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。